

グループ箱庭体験による対話的競技体験への変化が 競技力向上に及ぼす影響

江田香織*・三輪由衣**・中込四郎*

The Effect of Dialogical Athletic Experiences through Group Sand Play to Performance Enhancement

EDA Kaori*, MIWA Yui** and NAKAGOMI Shiro*

Key words: Dialogical athletic experiences, team dynamics, sand play

1. はじめに

身体活動や競技体験による心理的発達やパーソナリティ形成については、前者の影響・効果を確認することが中心となってきたり、その機序について実証的研究はまだ十分とは言えない。今後、さまざまな心理的効果を期待し、現場での介入を適切（より大きな効果を得るため）に行うには、心理的变化を引き起こす要因およびその機序を明らかにする必要がある。特に、現場への示唆としては、アスリートがどのような体験によって自己形成を促進しているのか。その体験世界に迫った研究が求められている。

本研究者は既に、こういった視点からいくつかの研究を行い（江田・中込、2008; 2009 (a); 2009 (b); 江田・中込、2012）、アスリートの自己形成を促進する体験様式として、対話的競技体験を措定した（江田・中込、2012）。対話的競技体験とは、Hermansら（1992）の対話的自己論をもとに考案した、「身体活動の中で身体を通して自分自身と向き合う体験様式」である。ここで言う対話とは、主体である「私（I）」が他者の視点（me）から語りを行うと、Iとmeとの対話が生じ、自己の成長につながるというものである（江田・中込、2012）。本研究者は、このような対話が身体経験においても認められるのではないかと考えた。

実際に、トップアスリートは身体を通して対話を行っている。例えば、シンクロの鈴木絵美選手は彼女の身体感覚をはかる上で重要なことについて、足をまっすぐ上にあげる感覚を例に出し、「シンクロは採点競技であるから、見ている人の感覚が重要だけど、それだけでは自分が感じる『真っ直ぐ』の

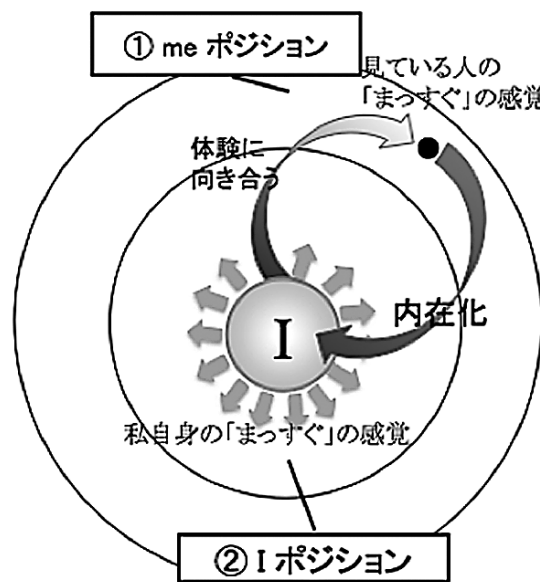


図1 溝上（2001, p. 57, 図 2-1）を基に独自に作成した鈴木選手の対話的競技体験のイメージ図

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

** 筑波大学体育系非常勤研究員
Part-time researcher, Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

感覚が分からなくなる。大切なのは、自分が得る感覚に見ている人の感覚を取り入れること」だと言っている(田中, 2007)。

鈴木選手の例を体験世界の中のポジション間の対話として読み解くと、「『見ている人の“まっすぐ”の感覚』を味わい、体験する」ということは、外的に求められる自分を味わう体験となると考えられる(図1①)。一方、「『私自身の“まっすぐ”の感覚』を味わい、体験する」ということは、ありのままの自分を味わう体験となると考えられる(図1②)。この2つの体験(図1①、②)を繰り返すことで、「私自身の“まっすぐ”の感覚(図1①)」の中に「見ている人の“まっすぐ”の感覚(図1②)」を内在化するものと考えられる。

先にも述べたように、アスリートの心理サポートは個性化と現実適応の両面から取り込まれるべきであり、本研究者はこれまで、個性化の側面を中心に検討してきた。対話的競技体験は自身の身体に注意を向け、様々な感覚や感情等と向き合うことを促進する。それは、必然的に主体的・積極的な競技への取り組みを生み出し、競技力の向上につながると考えられる。

先述したように、対話的競技体験は「身体活動の中で身体を通して自分自身と向き合う体験様式である」。本研究者のこれまでの研究は身体を狭い意味で捉えており、個人と競技との対話を中心に検討してきた。しかし、身体経験を広い意味で捉えると、競技場面での他者との関わりも、これに含まれる。したがって、集団競技において対話的競技体験が促進されると、チーム内の関わりが変化し、競技力の向上が可能になると予想される。江田・中込(2012)で取り上げた集団競技の選手からは、身体を通して自分自身と対話を行うとともに、チームメイトとも対話を行っていたと受け止めることが可能な語りがあった。彼らが非言語で独特なコミュニケーションを深めることによって、深いレベルでの関わり合いが促進され、組織的なプレーが可能となり、結果として、競技力の向上がもたらされたことを報告した。これらのことから、対話的競技体験によって、チーム内での関わりが変容するだけでなく、それによる競技力の向上が予想される。

チーム内の関わりを質を変容させるために有効であると考えられる方法の1つに、グループ箱庭療法が考えられる。箱庭療法は河合が日本に導入した非言語的表現技法の1つであり(河合, 1969)、これをグループで行う方法が提案されている(岡田, 1991)。グループ箱庭療法は心理臨床家のトレーニングとして岡田(1991)が開発した。この方法では

4~5人でひとつのグループを作り、各メンバーが原則として玩具を一つずつ置いていき、1つの作品を制作する。その間メンバーは話し合うことができないため、イメージ拡大の訓練という目的と、箱庭制作後にふり返りの時間を設けることによって、各メンバーがどのように制作し、それがどのように受けとめられたのか、その制作過程に働く力動を分析することをもう1つの目的に考案された。そのため、制作中には、先に述べたような競技場面でもしばしば見られるイメージの共有や非言語的なコミュニケーションが求められる。こういった作業はまさに身体を媒介して自己および他者との対話を促し、対話的競技体験を促進すると考えられる。

以上のことから、本研究はグループ箱庭体験による対話的競技体験の変容がパフォーマンスに及ぼす影響について検討することを目的とする。

2. 方法

2.1 対象

球技系集団チームに所属する女子選手28名(Ave=19.5, SD=1.24)を対象とした。28名の中から主力選手と交代選手を含む16名(Aチーム)を導入群とした。この16名の中から、毎回3~4人のメンバーを本研究の第2著者より指定し、グループ箱庭を実施した。そして同チームのBチーム12名を統制群とした。

対象となるチームは、前シーズンの全国大会にて上位入賞という高成績を収めていた。さらに今シーズンより、レベルの高いリーグに参加することになっていたが、前シーズンで主力メンバーであった4年生が多く抜けてしまい、チーム全体の競技能力が落ちてしまうのではないかと不安を抱えていた。さらに、今シーズンよりスタッフ陣(ヘッドコーチ1名、アシスタントコーチ2名、GKコーチ1名)が全員入れ替わっている。

本研究のグループ箱庭を心理的トレーニングとして介入することについては、チーム責任者(コーチ)への説明をし、同意を得た。その後、チーム全体への本研究の説明、同意を得て参加を求めた。

2.2 介入スケジュール

2011年5月9日~6月15日の約1ヶ月半を前期とし16セッション(一人あたり平均3.8回)行った(表1)。後期の介入は2011年9月20日~11月13日の約2ヶ月間に20セッション(一人あたり5回)、計36セッションであった(表2、3)。対象者全員が、それぞれ1週間~2週間に1回の箱庭体験をするように間隔をあけて行った。

表1 対象チームの年間スケジュールならびに介入スケジュール

月	チームスケジュール		介入スケジュール
	Aチーム	Bチーム	
1月			
2月	チーム練習開始		
3月	震災のため活動中止		
4月	チーム練習再開		
5月	Cリーグ(前期)	Dリーグ	心理テスト測定
6月			グループ箱庭体験
7月			心理テスト測定
8月			
9月	Cリーグ(後期) Eリーグ		心理テスト測定
10月			グループ箱庭体験
11月			心理テスト測定
12月			

表2 介入スケジュールと対象者の参加状況(前期)

セッション	対象者															
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P
第1セッション(5/9)				○			○		○	○						
第2セッション(5/9)			○										○		○	○
第3セッション(5/11)	○					○		○				○				
第4セッション(5/12)		○										○			○	
第5セッション(5/16)				○			○		○	○						
第6セッション(5/16)			○										○		○	○
第7セッション(5/18)	○					○		○				○				
第8セッション(5/19)		○			○							○			○	
第9セッション(5/25)	○	○		○	○											
第10セッション(5/25)										○	○		○	○		
第11セッション(5/25)			○					○	○						○	
第12セッション(5/25)						○	○					○				○
第13セッション(6/6)	○	○		○	○											
第14セッション(6/14)											○		○	○		
第15セッション(6/15)								○	○						○	
第16セッション(6/15)						○	○					○				○
合計回数(平均3.8回)	4	4	3	4	3	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4

表3 介入スケジュールと対象者の参加状況（後期）

セッション	対象者																	
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R
第 17セッション (9/20)				○		○											○	○
第 18セッション (9/22)	○							○						○		○		
第 19セッション (9/26)			○							○	○	○						
第 20セッション (9/27)				○		○											○	○
第 21セッション (9/29)	○							○						○		○		
第 22セッション (10/1)					○		○		○				○					
第 23セッション (10/5)			○							○	○	○						
第 24セッション (10/5)					○		○		○				○					
第 25セッション (10/18)				○		○											○	○
第 26セッション (10/19)					○		○		○				○					
第 27セッション (10/19)	○							○						○		○		
第 28セッション (10/20)			○							○	○	○						
第 29セッション (10/31)							○				○	○		○				
第 30セッション (11/1)					○											○	○	○
第 31セッション (11/2)				○				○	○				○					
第 32セッション (11/2)	○		○			○				○								
第 33セッション (11/7)							○				○	○		○				
第 34セッション (11/8)					○											○	○	○
第 35セッション (11/9)				○				○	○				○					
第 36セッション (11/13)	○		○			○				○								
合計回数(平均5回)	5	0	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	0	5	5	5

2.3 グループ箱庭の実施

グループ箱庭の実施は、本報告の第1著者と第2著者2名が行った。第1著者は臨床心理士とスポーツメンタルトレーニング指導士の資格を有し、グループ箱庭施行の経験があったが、第2著者はメンタルトレーニングとしては基礎的な知識を得ることを目的とした講義の履修経験しかなかったため、グループ箱庭の事前トレーニングが行われた。なお介入期間中、立会人は、制作された作品ならびにチーム状況に関わる情報を専門家に報告（月2回程度）し、スーパービジョンを受けた。さらに、グループ箱庭に関連する理論的理解ならびに症例検討会への参加が、専門家の指導の下、週1回継続して行われた。

グループ箱庭の実施については、岡田（1991）による原法をもとにチームスポーツ競技者へ適用した中込ら（2008）による方法に従った。

グループ箱庭の施行においては、各セッションに

おいてグループのメンバー構成に若干の操作を加えている。メンバーについては、対象者の競技特性（役職、ポジション等）や、性格特性、対象者のスケジュールをもとに、グループ編成を行った。そして本研究では、前期セッションに2回、後期セッションにて1回、グループを変更している。その意図としては、チームを構成するAチームの選手が箱庭を介して様々なメンバーと体験を共にする機会を作ろうとしたためである。対象者らは、コート上または日常生活において、日頃交流があることから、グループ編成が変更されたセッションでも、特に困惑することなく、スムーズに箱庭体験を行っていた。中込らの方法では、各セッションごとに異なるメンバーで構成されていた。しかしここでは、グループ箱庭でのメンバー個々の何らかの変容を期待することから、様々なメンバーとの箱庭体験を考慮しながらも、グループ編成の変更は数回に限定して行った。

2.4 介入効果の検討

以下の心理テストならびにパフォーマンス情報を手がかりに効果を評価した。

①心理的競技能力診断検査 (DIPCA.3) : 徳永・橋本 (2001) によって開発された DIPCA.3 を使用する。スポーツ選手に必要な試合場面における心理的能力を測定するものである。全 52 項目について、5 件法で回答を求めた。

②対話的競技体験尺度 : 身体を通して自己に向き合う体験様式を測定した対話的競技体験尺度 (江田・中込、2012)、全 22 項目に対して 5 件法で回答を求めた。

③集団効力感尺度 : 三輪 (2012) で作成されたチームメイト間で共有された、ある行動に対して成功できるかどうかに関する信念を捉えた尺度であり、全 19 項目に対して 5 件法で回答を求めた。

④内省報告ならびにチームパフォーマンスの観察 : 本報告の第 2 著者は対象チーム状況に詳しいため、今シーズンを通して、現場における選手またはチームの状況を報告する。「今のチームの状況」「チームの課題」「箱庭体験を通しての変容」等の観点から、選手の内省報告を踏まえながら、観察内容を報告する。

3. 結果

3.1 心理テストによる介入前後の比較

心理テストによる介入前後の比較を行うため、DIPCA.3 と対話的競技体験尺度、集団効力感尺度に対して 2 (介入群・統制群) × 2 (介入前後) の 2 要因分散分析を行った (表 4、5)。

なお、統制群の対象者 1 名については、練習参加頻度が極端に少なく、テスト実施日も 3 回の日程において欠席があったため、欠損値として扱った。そのため、統制群の対象者は 11 名となった。

分散分析の結果、DIPCA.3 のみ介入前よりも介入後の方が有意傾向で高い値を示した ($F(1,25)=3.56$,

$p<.10$)。対話的競技体験においては有意な結果は得られず、集団効力感に関しては、介入前よりも介入後の方が有意傾向で低い値を示した ($F(1,25)=3.86$, $p<.10$)。

3.2 グループ箱庭体験過程

①選手 C の体験過程を中心に紹介 : ここでは、C が参加したグループ箱庭の作品制作を中心に体験過程を紹介する。

C が参加したグループ箱庭の作品制作を紹介する。各セッションは表 2、3 で示した介入スケジュールと対応している。なお () 内の説明は、制作終了後の振り返りにて各参加者より言及された内容である。C の箱庭への関わり、さらにグループ内での関わりの変容について注目していく。C は介入期間中、合計 8 回グループ箱庭体験をしている。前期のセッションにおいて、C は玩具への強い関心を示し、自分の番となる時以外はほとんど、棚にある玩具を見て過ごしていた。「置きたいものを置いていった」「なんとなく、目についたから」といった振り返りでの報告も多くみられ、また他のメンバーが置く玩具に関しては、その時々感情を述べるものの、イメージレベルでの他のメンバーとの関わりはなかった。また、1 回目 (セッション 2) での振り返りで、C が「かわいくて置いた」という恐竜を置いたことに対して他のメンバーが対決の姿勢を見せる人間を置いたことで、C は「やっつけてしまうか…」とつぶやいていた。その様子を見た P が、2 回目の箱庭体験 (セッション 6) で「前回、C が合わせてもらっていたから」と、C の置いた玩具に反応する行動を起こした。しかし、その行動に対して C は「合わせてしまった。ごめん」と伝えている。一見置きたいものを自由に置いて、人の置くものには関心を示さない態度をとっているように見えたが、C のこの行動は、自分を表現することの困惑と、チームメイト関係への苦手意識をもつことから関わ

表 4 各尺度における介入前後の比較 (各尺度の平均値, 標準偏差)

	DIPCA		チーム効力感		対話的競技体験	
	pre	post	pre	post	pre	post
介入群 (N=16)	148.75 (5.23)	157.31 (4.61)	65.75 (1.88)	62.13 (2.09)	74.63 (2.50)	75.00 (2.65)
統制群 (N=11)	146.09 (6.31)	154.19 (5.56)	68.91 (2.27)	67.64 (2.52)	74.46 (3.02)	73.91 (3.20)

表 5 各尺度による介入前後の分散分析

介入・統制群	DIPCA		チーム効力感			対話的競技体験		
	介入前後	交互作用	介入・統制群	介入前後	交互作用	介入・統制群	介入前後	交互作用
n.s	3.56 [†]	n.s	n.s	3.86 [†]	n.s	n.s	n.s	n.s



写真1 セッション2の1回目

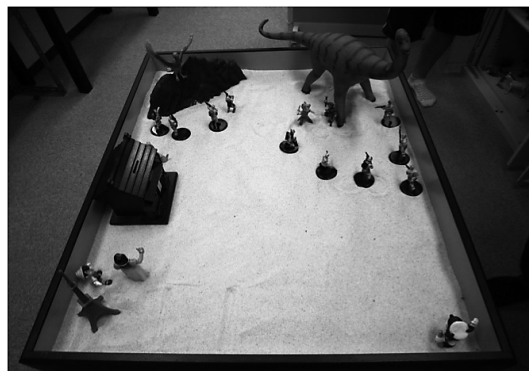


写真2 セッション2の2回目



写真3 セッション2の3回目



写真4 セッション2の4回目

表6 セッション2で使用された玩具

順番	制作者	巡回目					合計	テーマ
		1	2	3	4	補足		
1	P	大岩	原始人(2)	滝/丸太	人(9)		14	古代と現代の融合そして戦鬪と笑い
2	C	恐竜	東京タワー	桜の木	道路(2)	ディズニーキャラクター(3)	8	今と昔と理想と現実
3	M	不死鳥	ディズニーキャラクター(5)	河童	標識/車(3)		11	東京の先は…
4	O	兵隊(10)	旅館	人(2)	お墓		14	今と昔
	合計	13	9	6	16	3	47	

() は置いた玩具の数を示す

り方がわからないという葛藤や抵抗が考えられる。さらにCが比較的パスを多く選択することが多いことから、無意識に他のメンバーとの関わりを拒絶してしまっているのではないかと考えられる。この頃現場において、Cから立会人へ「サッカーが面

白くない」、「みんなが考えていることがわからない」、「このままのチーム状態でいいのか」というネガティブな発言を中心とする相談を受けている。実際コートではCが孤立して行動している様子が多くみられていた。

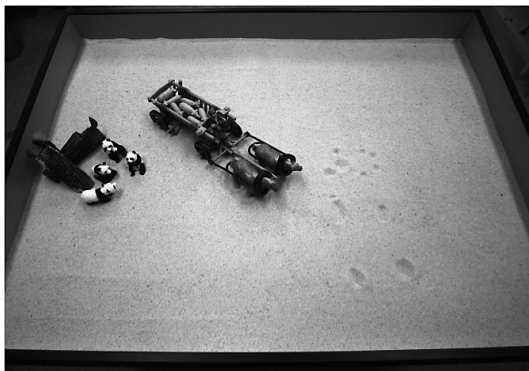


写真5 セッション32の1回目

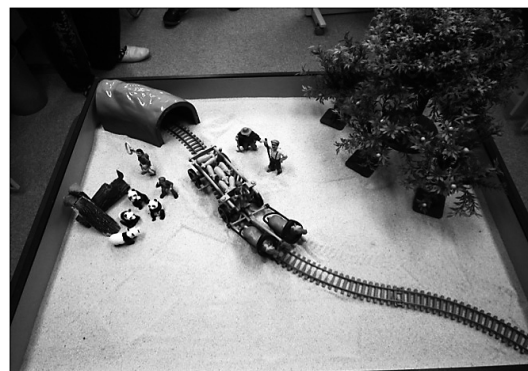


写真6 セッション32の2回目

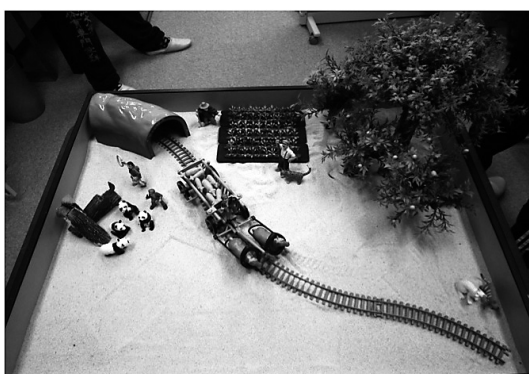


写真7 セッション32の3回目

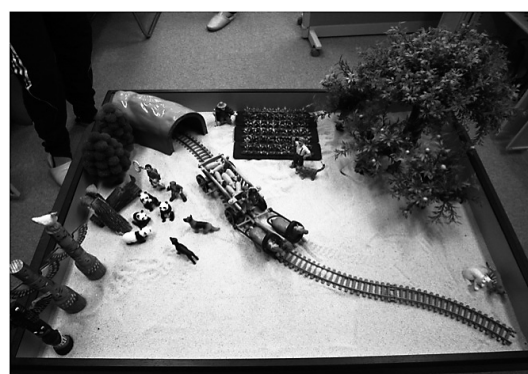


写真8 セッション32の4回目

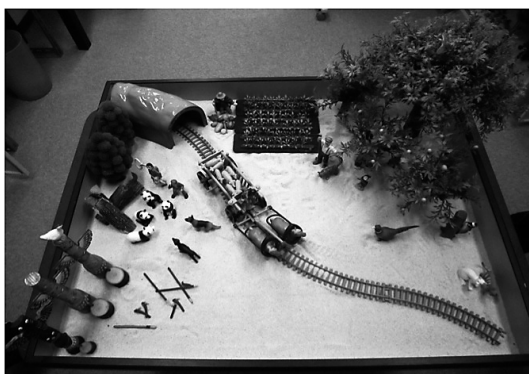


写真9 セッション32の5回目

しかし、後期セッションの1回目となるセッション19での箱庭体験から、Cに他者理解またはイメージの共有が見られるようになった。ここでの振り返りで「作品をみて考えるようにした」と述べ、Cが共有できる範囲を超えてパスを選択してしまったこともあったが、このセッションより人との関わりを持つ姿が顕著に現れるようになった。このことはまた、自分の順番の際に、作品について考え込む時間が増えたことから推察できる。これらのことから、立会人にはCが他者との関わりを求めて動き出したように見受けられた。

そして、後期セッションの終盤においては、他の

メンバーとイメージレベルでの同調がなされている作品がみられ、Cも含めたグループで一つの作品を作り上げたことによる満足感があったようである(セッション32)。ここからの箱庭体験にてCは、他のメンバーが考えこむ時間ができると、時折棚にある恐竜や人の玩具を床に並べ、座りながら玩具で戦いのシーンを演出しながら一人で遊ぶことがあった。河合(1969)は「箱庭には心理的な退行をみせることがある」と述べている。箱庭体験によってC自身の内界への働きかけが促され、そのエネルギーの大きさが箱の枠に収まりきれなかったようであった。これは箱庭療法の中では、しばしば治療の限界となり中止されることも検討されるが、Cのこれらの行動は、他のメンバーとの空間への安心感、信頼感より生まれたものであると理解でき、今後Cが競技の中でさらなる自己理解と他者理解を深め、コミュニケーションを促進していく上での手がかりとなると期待された。

さらに、Cにおける心理テストによる介入効果の検討では、DIPCA、対話的競技体験の介入前後にて、それぞれDIPCA: 152 → 174、対話: 73 → 77と得点が上昇している。集団効力感は前述したように、競技成績等の外的要因により減少しているが、個人レベルでの内的成長が見られたことは、グ

表7 セッション32で使用された玩具

順番	制作者	巡回目						合計	テーマ
		1	2	3	4	5	補足		
1	C	荷馬車	レール(4)	猿(3)	犬(2)	—	狩り道具(8)	18	さよなら豚さん
2	F	豚(7)	人(4)	畑(3)	トータム ボール(3)	切り株(3)		20	トンネルを抜けると...
3	A	切り株(2)	トンネル	ねこ(2)/馬 (2)/ひょう	木(2)	鳥(2)/きつつ き/きじ/ふく ろう		15	ミニ豚の出荷
4	J	パンダ(4)	木(4)	ビー玉	にわとり	切り株/ 野菜(11)		22	獲物を狙え
	合計	14	13	12	8	20	8	75	

()は置いた玩具の数を示す

ループ箱庭の介入による心理的変容の効果だといえるだろう。

4. 考察

本研究はグループ箱庭体験による対話的競技体験の変容がパフォーマンスに及ぼす影響について検討することを目的とし、球技系チームに対してグループ箱庭を用いた介入を行った。その結果、期待された介入効果は得られなかった。その要因として、選手またはチームに関する外的要因の大きさが挙げられる。今シーズンは選手の競技力の総量が低下することが予想されていたが、実際の今シーズンの公式戦（介入期間中の大会）におけるパフォーマンスは、結果として21戦中1勝3分け17敗となっていた。つまり、試合での負けが続き、選手の中で集団効力感を感じる経験が極端に少なくなってしまうと言える。さらに、そのように負けが続いている状況では、何をしても無駄なように感じられることが予想され、選手が主体的に競技に対して試行錯誤することは非常に困難であった可能性が考えられる。

さらに、大きな外的要因の一つと考えられるものに、指導者との関係がある。今シーズンよりスタッフ陣が総入れ替えをし、ヘッドコーチとして就任した指導者との信頼関係を十分に築くことができず、シーズンが始まった頃「コーチに対する不信感」、「練習での充実感のなさ」、「チームとしての方向性がみえない」といった内省報告があった。チームの運営を担う4年生と本報告の第2著者を含め、他のスタッフ陣はこれらの問題についてかなりの時間をかけて、改善を試みたが、選手との関係を修復でき

ず、後期のシーズンが始まる前にスタッフ体制を変更する事態となってしまった。さらにはチームを牽引する役割を担う4年生がシーズン途中に諸事情から2名退部したことも、チームに対する信頼やまとまりを失うことにつながったと考えられる。Chaw and Feltz¹ (2008)は、「実験室内またはスポーツ場面の両方で集団効力感とチームパフォーマンスの間には、肯定的な関連が明確となっている」と述べており、集団効力感はチームのパフォーマンスの影響を大きく受ける尺度であることから、現場レベルでのパフォーマンス成績（今季公式戦21試合中1勝）、さらには指導者との人間関係の悪化等から受ける外的要因によって、グループ箱庭体験から期待される選手の内外界への心理的アプローチによる変容効果が、現場レベルでの競技力向上までつながらなかったと推測される。

しかし、選手個々のグループ箱庭の介入による体験過程の変容に注目してみると、箱庭を通して選手が自分自身の内界やチームメイトとの対話を行っていることが読み取れた。コート上とは異なる水準でチームメイトとの共同体験を行うことは、自己理解、他者理解を深めるだけでなく、イメージの共有やコミュニケーションの促進が図られる。また選手は、グループ箱庭の振り返りの作業によって、イメージの言語化を行い、それを共有することで自分の中にあるイメージを再統合する機会を与えられる。イメージは意識と無意識の中間領域と言われていたが（山中、1999）、そこから出てきたものを意識化する作業は、競技において直感的な感覚をチームプレーに生かす作業に似ており、これは競技にお

ける非言語的なコミュニケーションを促進すると考えられる。

球技系集団競技は、様々な状況の中で常に判断を繰り返さなくてはならない。その中で自分、あるいは味方のプレーの意図を明確にするために、イメージの共有や言語化は非常に重要となる。さらには、物理的にコミュニケーションが取れない状況でイメージが共有されることは、チームプレーの能力の向上につながると考えられるため、球技系集団競技におけるグループ箱庭体験の介入は、有効なMTとして考えられる。

文 献

- 1) Chaw, G.M. and Feltz, D.L. (2008). Exploring new directions in collective efficacy and sport. In: Beauchamp, M.R. and Eyes, M.A. (Eds.) Group dynamics in exercise and sport psychology: Contemporary themes. Routledge: New York (UK), pp.221-248
- 2) 江田香織・中込四郎 (2008) アスリートの自己形成における随伴的自己価値に及ぼす愛着の影響. 臨床心理身体運動学研究, 10: 11-23.
- 3) 江田香織・伊藤正哉・杉江 征 (2009a) 大学生アスリートの自己形成における本来感と随伴的自己価値が精神的健康に及ぼす影響. スポーツ心理学研究, 36 (1): 37-47.
- 4) 江田香織・中込四郎 (2009b) アスリートの相談事例に見られる「自己形成」の特徴. 臨床心理身体運動学研究, 11: 17-27.
- 5) 江田香織・中込四郎 (2012) アスリートにおける競技体験の内在化を促進する対話的競技体験. スポーツ心理学研究, 39 (2): 111-127.
- 6) Hermans, H. J. M., Kempen, H. J. G., & Van Loon, R. J. P. (1992) The dialogical self: Beyond individualism and rationalism. *American Psychologist*, 47: 23-33.
- 7) 河合隼雄 (編) (1969). 箱庭療法入門 誠信書房.
- 8) 中込四郎・武田大輔・小谷克彦 (2008). 女子ボールゲームチームへのグループ箱庭の適用－箱庭から競技場へ. スポーツ心理学研究, 35(2): 67-79.
- 9) 三輪由衣 (2012) 大学女子サッカーチームへのグループ箱庭の適用による効果の検討. 平成23年度筑波大学大学院人間総合科学研究科修士論文.
- 10) 岡田康伸 (1991). グループ箱庭療法の試み 京都大学教育学部紀要, 37: 155-177.
- 11) 田中夕子 (2007) トップアスリートの身体感覚 (12) シンクロナイズドスイミング 鈴木絵美子 (ミキハウス). 月刊トレーニング・ジャーナル: 東京, 29(8): 48-51.
- 12) 徳永幹雄 (2001) スポーツ選手に対する心理的競技能力の評価尺度の開発とシステム化. 健康科学, 23: 91-102.
- 13) 山中康裕 (1999) 創刊にあたって. 臨床心理身体運動学研究, 1: 1-2.